

藤澤禎子先生のこと

今月10日に大阪地裁で無罪の判決を受けた、厚労省元局長の記者会見をテレビで見た。この人は厚労省の女性キャリアーのNo.1だったそうだが、記者会見では、無罪判決を素直に喜ぶ笑顔が良く、質問への対応に官僚特有の硬さがないので、私は好印象を持った。それよりも私が驚いたのは、この人の容姿が藤澤禎子先生に似ていることだ。細面の顔立ちが似ており、髪を引っ詰めにして後ろで丸めているところも似ている。

藤澤禎子先生は、私が小学校5年、6年の2年間にわたって教えてもらった方だ。私は、小学校1年から4年まで、良い先生に巡り合わなかった。時代が戦中から戦後の混乱期であったことも関係しているかもしれない。第1学年と2学年は男女共学だったが、3学年と4学年は別学だった。3学年の数箇月と4学年には、担任は男の先生だったが、その2人は私には合わない人たちで、私はどちらかと言えば学校嫌いだったと思う。

そのやや不幸な状況は、5年生になって一変した。この年度(1947年度すなわち昭和22年度)から、高学年も男女共学になったこともあったが、担任が藤澤先生になったことが大きかった。この先生は兵庫女子師範学校(当時は明石市にあった)を卒業して、1943(昭和18)年4月に西宮市立甲東小学校(当時は国民学校)に赴任して来られたのだが、それは、私が同小学校に入学したときでもあった。この時期の師範学校卒業

者が何歳で正式の教諭になれたのか正確なことはわからないのだが、藤澤先生は多分20歳で、このとき初めて正式の教職に就かれたはずだ。

すらりとしたスタイルで、手足が長く見えたので、上級生は直ぐにカマキリという綽名を付けた。藤澤先生はいつもスラックス姿だった。スカートをはいた姿やワンピースを着た先生の姿は、私の記憶にはない。子供たちは意外に人の特徴をよく掴むもので、カマキリという綽名は確かに当たっていた。しかし、その4年後にこの先生が私のクラスの担任になられたときには、私たちはこのやや失礼な綽名を余り使わなかった。

私が藤澤先生から教えてもらった時期には、先生は24歳から25歳だったはずで、まだ若かったのだが、教師としての実力があつた。お蔭で、一般に学力が低下していた戦後の混乱期のなかで、私の学力は一応のレベルに達していたようだ。今でいう生活指導もテキパキとしていた。この先生の下で、私は2年間のほとんどの期間に学級委員長を務め、先生の助手的な役を担った。同級生全員から必要な費用を集める仕事はいつも私がした。それでトラブルが起きたという記憶はない。

5年生の秋ごろだったと思う、私が校庭で同級生と何かしていたとき、校舎の上階の窓から私の名前を呼ぶ声がした。甲東小学校の校舎の一部は、当時珍しかった鉄筋コンクリート3階建てで、その3階から私

を呼んだのは6年担当の男の先生だった。何事かと思って、3階に駆け上がった。一緒に居た5年生の友達も皆ついて来た。私を呼んだ先生が黒板に書いてある計算式を指差して、「この計算をしてみなさい」と言われた。それは分数の足し算だった。難しいものではなかったのですが、6年生50人ぐらいが見ている前で、私はその計算をアッサリやっつてのけ、それで放免された。

こういうことがあった理由は、直ぐにわかった。分数の計算ができない6年生が多いので、先生は腹を立てて、5年生にもできる問題だということを実際に見せようとしたのだ。それで、確実に計算ができると目星をつけた私を呼んだというわけだ。このやり方は教育手法としてほめられないものだろう。しかし、今から10年ほど前に話題になった「分数ができない大学生」の萌芽が、60年以上前にあったことがわかるという意味では興味のあることだった。

6年生の秋ごろ、卒業後の進学が問題になった。当時はそれぐらいノンビリした時代だった。私立の中学を受験するか、それとも設立後間もない公立中学に行くかを決めなければならなかった。結局、私は灘中を受験することになった。私のクラスでは、灘中を受験するのは私だけで、他に甲南や関西学院中等部を受験する生徒が数人いた。藤澤先生は、この受験組のために、放課後残り勉強をさせて、力を付けさせようと言われた。表向きこういうことはしないことになってはいたようだが、先生は全くのサービスとして、かなりの時間を当てられた。私たちの下校時間は遅くなった。私の場合は、学校から自宅まで2キロメートルほどあり、その間のほとんどは田んぼ、山道、畑だった。秋から冬にかけて、夕日を浴びて自分の影が地面に長く伸びているのを見ながら、帰路を急いだことが相当の回数あった。お蔭で、受験組は皆合格することができた。

今の先生もいろいろと忙しいようだが、当時の先生も大変だった。給食の世話は、担任の先生の仕事になっていたの、パン

などを配ることから、ミルクやジュースを各生徒のコップに注ぐことも先生がされた。紙パックのミルクやジュースが出てきたのはずっと後のことだ。私は当時から脂っこいものやミルクは好きではなく、ジュースが好きだった。藤澤先生はそのことを知っていて、私にはジュースを多めに注ぎながら、関西弁で「田隅君は山の小鳥やな」と言われた。

藤澤先生は教員組合の活動に熱心だったようだ。1947(昭和22)年2月1日に予定されていたゼネストがGHQ(連合軍総司令部)の命令で取止めになったことがあった。その直前に、他の先生が私たちにゼネストについて何か言ったという記憶がある。こういうことと関係していたのかもしれないが、普段はごく常識的だった藤澤先生が学期末試験に妙な問題を出されたことがあった。それは社会科の試験問題のひとつだったが、「タフト・ハートレー法とは何か」というものだった。アメリカの労働運動を制限するためのこの議員立法のことは、当時日本でも話題になることが多かったのだろうが、小学校6年生の試験にそれを出すというのは普通では考えられないことだ。この法律の日本への影響を、先生は深刻に考え過ぎていたとしか思えない。

この試験問題のことを私が鮮明に記憶しているのは、次のようなことがあったからだ。全く偶然なのだが、試験の前日の新聞に出ていたこの法律に関する記事を私は見えていて、本当のことは何も理解していなかったにも拘わらず、「アメリカの労働運動を制限する法律で、上院でタフト議員、下院でハートレー議員が提案したもの」という完全な回答を書くことができた。クラスでこの問題に回答できたのは私だけで、他の全生徒の点数は下がり過ぎることになった。藤澤先生は仕方なく点数に下駄をはかせたので、私の点数は120点ぐらいになり、その学期の平均点も100点を超えてしまった。そのことは、他の先生にも知れて、職員室で話題になったようだ。

私たちが卒業してから少しあとで、藤澤先生は受験組の生徒ら数人を宝塚の北西にある生瀬(なまぜ)というところにピクニックに連れて行ってくださった。そこには武庫川の上流があり、河原でバーベキュー的なことをした。卒業してしまった元の生徒たちのために、そこまでしてくださったことは、今思い出しても不思議な気がしている。

その後、私は一度だけ藤澤先生に会ったことがある。それは、私が日比谷高校の2年生だった1953(昭和28)年の春のことだった。そのとき、私はもちろん東京に住んでいた。修学旅行で京都に行くことになったので、その前に、ひとりで先行して、西宮市甲東園の先生のお宅(正確には下宿先だったのだが、先生とそのお宅とは多分親戚関係にあった)に伺った。残念ながら、このとき何を話したかはほとんど覚えていない。後まで記憶に残るような話をするべきだったと思う。というのは、藤澤先生はその後10年余りで亡くなったからだ。まだ40歳ぐらいだったはずだ。何が原因で亡くなったのか私は知らない。元気でおられれば87歳ぐらいの藤澤先生とお話をする事ができれば、どんなに良いかと思う。しかし、それは叶わぬことなので、その代わりに、先生のお墓を探し当てる事ができれば、是非墓参したいと思っている。

(おわり)